

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ウスバサイシン *Asiasarum sieboldii* (Miq.) F. Maekawa (= *Asarum sieboldii* Miq.) (ウマノスズクサ科 Aristolochiaceae)

桜の季節が過ぎ、木々の青葉が目にしみる頃、山歩きをしながら、ふと足元に目をやるとハート型の葉を2枚、そして葉の根元には隠れるようにして茶褐色の小さな壺型(つぼがた)の花を付けた植物を見かけることがあります。ウスバサイシンです。本植物の仲間は狭い地理的分布域があることからカンアオイ *Asarum nipponicum* をはじめ、とてもたくさんあり、しっかりした鑑別が出来るようになるには、かなりの勉強が必要です。ウスバサイシンは日本から中国にかけて分布し、林床に生える多年生草本で、葉は冬には落葉し、早春に長い柄を出し、薄く光沢の無い深緑色心臓型の葉を多くは2枚生じ、春に葉の間から淡汚紅紫色をした花を1つ咲かせます。花に花弁はなく萼(がく)裂片が花弁状になっています。すなわち3枚の三角形の裂片が萼片です。近縁の植物にフタバアオイ *Asarum caulescens* がありますが、こちらは薬用とはならず、5月に行われる京都の賀茂神社(上賀茂神社・下鴨神社)の葵祭のシンボルとして、また、フタバアオイの葉をアレンジし3枚組み合わせた「三つ葉葵」は徳川家の家紋(葵の御紋)としてよく知られています。ウスバサイシンの花の形は近縁のカンアオイとよく似ていますが、ウスバサイシンの花筒の内部には縦溝だけがあって横溝がない点で区別できます。

ウスバサイシンの名は中国に分布するサイシン(細辛)の仲間で、葉が薄いのでウスバ、サイシンとは根が細く咬むととても辛いことに由来しています。本植物およびケイリンサイシン(鶏林細辛) *Asiasarum heterotropoides* の根および根茎を乾燥したものを生薬、サイシン(細辛, *Asiasari Radix*) といい、ちんがい きょたん ちんつう 鎮咳、去痰、鎮痛を目的として、しょうせいりゅうとう まおうぶしさいしんとう どうきしぎやくとう 小青竜湯、麻黄附子細辛湯、当帰四逆湯などの漢方処方に配剤されます。成分としては、根に2~3%の精油成分(methyleugenol, safrole,



写真3 ウスバサイシン(花)



写真4 カンアオイ(1)



写真5 カンアオイ(2)



写真6 フタバアオイ(花)



写真1 ウスバサイシン(1)



写真2 ウスバサイシン(2)

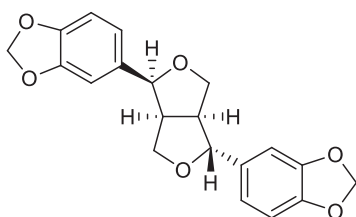
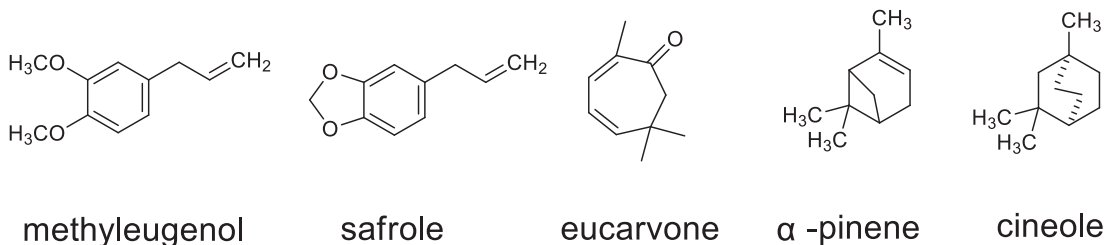
eucarvone, α -pinene, cineole), リグナン ((-)-asarinin), 辛味成分(pellitorine), アルカロイド(higenamine)などが含まれています。また、ウスバサイシンやカンアオイの仲間は、蝶の食草としても知られ、ウスバサイシンはヒメギフチョウの食草、カンアオイやフタバアオイは春の女神ともいわれるギフチョウの食草となっています。このような蝶と食草の間には、長い年月をかけた蝶や昆虫と精油などのいろいろな植物成分との深い関係があるものと思われる。また、本植物の種子は上胚軸休眠種子とよばれ、植物体が種子を飛散させる状態になっても、種子内部の胚は未成熟で、湿潤埋蔵期間中(土壌中で発芽時期までの期間)に胚が肥大成長し発芽するようになります。

なお、本植物の地上部には、重篤な腎障害を起こす恐れのある aristolochic acid I を含有する

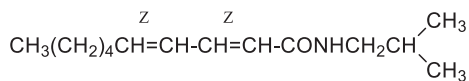


写真7 生薬:サイシン(細辛)

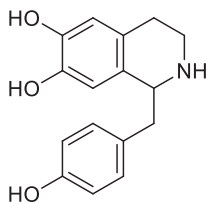
ので要注意です。また、本植物の学名について APG 分類では *Asarum sieboldii* Miq. と *Asiasarum sieboldii* (Miq.) F. Maekawa があり、第 17 改正日本薬局方では *Asiasarum sieboldii* F. Maekawa を使用しています。



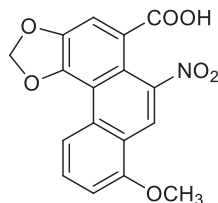
(-)-asarinin



pellitorine



higenamine



aristolochic acid I

図 1 成分の構造式